



創立1880年

〒169-0051

東京都新宿区西早稲田2-3-18

日本キリスト教会館6階

Tel 03-6302-1960

URL http://tokyo.ymca.or.jp

発行所 公益財団法人

東京YMCA

発行人 菅谷 淳

# 東京YMCA

# 12

2019年

## 東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

YMCAオリブ保育園(2018年度) 年長児によるクリスマスページェント



## 聖書 「ルカによる福音書」 2章1節～7節

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録せよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行なわれた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのれの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけの MARIA と一緒に登録するためである。

ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らの宿まる場所がなかったからである。



## クリスマスの意味



「ルカによる福音書」2章に、ユダヤ地方を支配していたローマ帝国の皇帝から人口調査の勅令が出て、人々は出身地で登録するよう求められたと証言されています。これは支配下の住民に人頭税を課すためでした。勅令に従って、ヨセフはベツレヘムという町を目指して旅します。ベツレヘムは、栄光に満ちた王ダビデの出身地。ヨセフはダビデ家に連なる一人でしたので、一族の出身地であるその町を目指して旅しました。身重ですでに臨月を迎えていたいなづけの MARIA を伴ったことです。

町に到着してみると、登録のために戻ってきた多くの者たちでごった返していました。若く貧しく、力のない二人は泊まる場所を見つけないまま、宿屋には彼らの泊まる場所がなかったから(2章7節)とあります。が、当時の田舎に宿屋などなく、実際には親戚を訪ねたのに宿泊を断られたのだからと想像されて

います。臨月の女性を伴っていたにもかかわらず、どこにも居場所が与えられませんでした。家畜小屋を見つけた、そこに潜り込んだ二人。当時、母屋近くの洞窟などに設けられていた家畜小屋。産気づいた MARIA は、そんな暗く寒い場所です。その子を出産し、その子を飼葉おけに寝かせたというのです。これが最初のクリスマス。誰にも顧みられない、とても小さく、暗く寂しい出来事でした。

ある神父が6歳時のクリスマス思い出を書いていらつしやいました。熱心な信仰を抱く両親は、少年にクリスマス・プレゼントを渡す時、次のように言ったとのこと。「プレゼントよりもずっと大切な、クリスマスの意味をこそ知ってほしい。神さまが人間という小さな存在になって、イエス・キリストを降らせ、すべての人を救ってくださった。」

クリスマスの意味がまだよく理解できなかった少年。おばあさまが、19世紀半ばに生きたタミアンというベルギー出身の神父について話してくれたい。タミアン神父は、ハワイ地域に派遣されたタミアン神父。当時、ハワイ諸島にはハンセン病にかかった人たちがあふり、政府は患者たちをモロカイ島に隔離し、交わりを断りました。患者たちは、生涯、島外に出ることはできません。月一度、ハワイ島から船が島の近くまで行き、食糧を積んだボートを降ろします。モロカイ島の患者たちは、このようになっていました。

しかし、神父は患者たちと自分には越え難い隔たりがあると感じていました。ミサで語りかける時、「患者であるあなたがたは…」と言わねばならなかったからです。ある日、神父は足に湯をこぼしても熱さを感じず、手首に黒い斑点が表れたのを見て、病の兆候だと気づきます。次の日、ミサに集った人々に大きな喜びをもって、「患者であるわたしたちは…」と語りかけたというのです。16年間、島に暮らした

タミアン神父は、患者たちに神の愛と希望を豊かに取り継ぎ、49歳で帰天されました。



古賀 博

日本キリスト教団早稲田教会牧師/公益財団法人東京YMCA評議員会会長

## 寄稿

### 自らの内にキリストを迎える

申し出に司教は感心しますが、同時に深く心を痛めます。将来を嘱望されていた一人だったからです。しかしタミアン神父の召命は確かです。少年は後に献身して自らも神父となり、このように書きました。

「神は私たちを救うためにこの世にいられた。貧しく悲惨な生活をしてきた人びとの中に、同じ人間として来てくださった。モロカイの人々の中にタミアン神父が来て人びとの生活を変え、希望を与えたように、私たちが生活を変え、神の子、兄弟としてくださった。これが本当のクリスマスである。金銭的、精神的に苦しみ、人間としての権利さえ奪われている人びとに、兄弟としての愛と慈しみを与え、共に生きる時、今日もキリストは人となりたまひ、私たちの中にお住みになるのである。」

この時、私たちが喜びと感謝を胸に愛と慈しみを周囲と分かち合っていたのは、早稲田松竹映画館と戸塚第二小学校だ。淋しい思いもあったが、学生街としての活気は昔のまま。学舎も山手会館もリニューアルされ、この活気ある街で生き続け、意義ある青少年活動が継続されていることに、感謝した。(会員/ひがしワイズメンズクラブ副会長 須田哲史)

## 赤三角

東京YMCA山手センター5階にある男子学生寮「山手学舎」が65周年を迎え、11月末にOB総会が開かれた。私は40年前の大学4年間をこの寮で過ごした。大学とアルバイト以外の大半の時間は、舎生、YMCAのボランティアリーダーと子どもたち、職員、会員たちと過ごした時間である。ともに語り合い、歌い、学び、祈る時間を過ごしたのだ。当時は山手センターだけで200人ものリーダーがいて、自らリーダーシップ育成方法の開発やキャンプ場の設備作りなどにも主体的に関わった思い出がある。おかげさまで、自ら動く、助け合う、無から有を創るといった人生の基盤が自然と育まれ身についた。それは、将来の人生に繋がる道であり、出会いだった。国内だけでなく、世界にも繋がる道と人だ。▼記念総会の日、当時は思い出しながら高田馬場駅まで歩いた。道沿いに今も残っていたのは、早稲田松竹映画館と戸塚第二小学校だ。淋しい思いもあったが、学生街としての活気は昔のまま。学舎も山手会館もリニューアルされ、この活気ある街で生き続け、意義ある青少年活動が継続されていることに、感謝した。(会員/ひがしワイズメンズクラブ副会長 須田哲史)



# 台風15号19号 被災地支援活動中



千曲川決壊場所から100mほどのみそ蔵「小川醸造場」での泥かきワーク



泥かきワークのボランティアと「小川醸造場」の小川泰祐さん（前列左3人目）



長野市北部災害ボランティアセンター

関東と東北に甚大な被害をもたらした台風15号と19号の被災者のため、全国YMCAは各地に職員やボランティアを派遣するなどして支援活動を行なっています。東京

必要の方をリソースとしてお招きし、変化に対応して頂きました。また初めて災害支援を担う職員に対して「なぜ今これを行っているのか」等を伝えて共有していくこともまた、YMCAの大きな役割だと思っています。長野市の災害ボランティアセンターは全国で最も多くのボランティアを集めているセンターです。それはなぜか、支援と共にその理由も学んでもらいたいという期待も込めて11月22日から24日、東京YMCAの学生・職員15人を派遣しました。東京YMCAの協力で、野尻キャンプ場にも宿泊させていただきました。千曲川決壊場所から100メートルほどの津野地区で泥かきボランティアをしました。長野市の災害ボランティアセンターは12月15日に閉鎖予定ですが、新たに「支え合いセンター」を設置し、戸別訪問や地域サロン事業など支援を継続していきます。東京YMCAは引き続き賛育会と共にこのセンターに協力していく計画で、12月12日に行なわれるセンターのオープニング式典には東京YMCAの菅谷淳総主事も列席します。さらに今後は、この北部地域で特に被害の大きかった小学校や保育園の親子を対象にリフレッシュキャンプも行っていく予定です。引き続きご協力をお願いします。秋田正人（エリアセーフティ担当）

## 現場担当者 所感

東京YMCA山中湖センター主任主事／災害支援担当 佐久間 眞人

私は阪神淡路大震災を始め、これまでいくつかの災害支援に携わってきましたが、堤防決壊の現場は初めての経験でした。決壊した影響をもちに受けた地域は、津波の後のように家も流れ何も残っていない状態でした。しかしそれは一部で、大半の地域は泥水が押し寄せて床上、ひどい所では2階の床面にまで泥水につかされた家もありました。津波のように何も残らないのも大変なことですが、泥水につかされた家財や家を抱えながら復興に向かうこともまた辛いことだと痛感しました。変わり果てた家や家財に心をとられれば、なかなか前に進めなくなります。一方で、泥のかき出し、家財の搬出と選別、床の撤去、床下の泥出し、ぬれた断熱材の撤去、床下の消毒など、膨大な作業をこなさなければなりません。

そのため今回はボランティアバスを導入するなどして1日で3000人超ものボランティアが派遣されました。このシステムは“長野方式”とも呼ばれて注目されています。私たちが阪神淡路大震災で初めて活動したときは1日250人が精一杯でした。

これからは住民の復興スピードの格差が問題です。まだまだマンパワーが必要なご家庭もあり、特にりんご農家には農業ボランティアもスタートしています。そろそろ避難所から仮設住宅やみなし住宅に進む時期ですが、新しいコミュニティ作り、人が支え合う環境を生み出せるかが大切となってきます。その一方で在宅避難者も心配ですし、YMCAには災害によってさまざまな影響を受ける子どもたちを守るための動きも求められています。

被災直後、東日本地区のYMCAで「東日本エリアセーフティ担当者会」を開催し、YMCAの拠点のない長野県・福島県の支援をどうするかなど、今回の支援の方向性について検討しました。そうした中、東京YMCAと関係の深い社会福祉法人賛育会から、被災した豊野事業所（長野市）への支援要請があり、10月25日から東京YMCAは継続的に職員を送ることとなりました。「賛育会」はもとも東京大学YMCAの会員が設立した病院で、豊野事業所は特別養護老人ホームやグループホームなど9機関を併設する、地

域の医療・福祉の大型拠点です。千曲川の決壊により1階部分が全て冠水して事業がストップする中で、長野県社会福祉協議会からの要請を受け被災者支援を行なうこととなり、東京YMCAにボランティアコーディネーターなどの協力依頼がありました。東京YMCAは賛育会と連携しながら「長野市北部災害ボランティアセンター」の運営をサポートし、何をどのように担うか、またどのような体制で行うか、こうしたオペレーションを決定しました。一刻と変化する被災地の状況を見守りながら、横浜YMCAを含め、その時々

に必要な方をリソースとしてお招きし、変化に対応して頂きました。また初めて災害支援を担う職員に対して「なぜ今これを行っているのか」等を伝えて共有していくこともまた、YMCAの大きな役割だと思っています。長野市の災害ボランティアセンターは全国で最も多くのボランティアを集めているセンターです。それはなぜか、支援と共にその理由も学んでもらいたいという期待も込めて11月22日から24日、東京YMCAの学生・職員15人を派遣しました。東京YMCAの協力で、野尻キャンプ場にも宿泊させていただきました。千曲川決壊場所から100メートルほどの津野地区で泥かきボランティアをしました。長野市の災害ボランティアセンターは12月15日に閉鎖予定ですが、新たに「支え合いセンター」を設置し、戸別訪問や地域サロン事業など支援を継続していきます。東京YMCAは引き続き賛育会と共にこのセンターに協力していく計画で、12月12日に行なわれるセンターのオープニング式典には東京YMCAの菅谷淳総主事も列席します。さらに今後は、この北部地域で特に被害の大きかった小学校や保育園の親子を対象にリフレッシュキャンプも行っていく予定です。引き続きご協力をお願いします。秋田正人（エリアセーフティ担当）



\*支援関連情報はホームページをご覧ください

→ [http://tokyo.ymca.or.jp/support/support\\_newslist.html](http://tokyo.ymca.or.jp/support/support_newslist.html)

## 子育てコラム



### 親はあっても子は育つ

「親はあっても子は育つ」。そんな言葉を聞いたのは、私が一人目の子育てに奮闘していた時でした。幼稚園の先生をしていた私に、周りの人たちから「子育てのプロなんだから大丈夫！」と、励ましというよ

りもプレッシャーにしかならない言葉をかけられながらも、いざ自分の子どもを目の前にすると、それは全く想像とは違うものでした。予想を遥かに上回る愛おしさはあるものの、それ以上の親としての大きな重圧。今では思い出すことさえできないような小さなことで一日中悩んで真つ暗な気持ちで夜を過ごしたことも何度もありました。そんな時に聞いたのが、冒頭の「親はあっても・・・」です。「親はなくても・・・じゃないの？」と不思議に思っている「子どもはみんな

な自分で育つ力を持って生まれてくるのだから、親がなくてもなんておこがましい、親なんていなくたって子どもはしっかり育つていくんだよ」ということでした。少し乱暴な表現に思えますが、その時の私はその言葉を聞いて肩の力が抜け「私だけが頑張り過ぎなくてもいいんだ」と、気持ちが楽になったことを覚えています。

今回、このコラムを書くにあたって第一回の新澤誠治先生のコラムを読み返してみると、そこには、「子どもはみんな育つ種を与えて」

芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ学童クラブ 竹内 尚子



### 総主事カフェ

東京YMCA総主事

### 菅谷 淳

総主事カフェによる。私が今いるこの総主事室はビルの6階にあり、大きな窓から見える景色は東京にしては緑も多く、四季折々が感じられます。遠くを眺めているとふと地球という星について考えました。

と銀河の周りを回っているその速度は時速86万km。これは想像もできないマッハ705だそう。地球が太陽系の中で今の位置にある事実も驚きです。地球から太陽までの距離は約1億5千万kmと地球の直径の1万倍も離れているのに、地球のわずか半分太陽から遠いと北極や南極のように氷の世界、近いと赤道のように灼熱の世界です。もし地球1個分でも太陽に近いところに位置していたら暑くて住めないし、もし地球1個分でも太陽から遠いところに位置していたら寒くて動植物は今のようになかったかもしれません。地球の周りに地球に似た星がたくさんあ

ると思っています。先月地球温暖化対策の国際的枠組み「パリ協定」から米国が正式に離脱を通告しました。環境が破壊されそれが気候変動を招き毎年のように自然災害が発生しているのは周知の事実です。また冷戦時代より減ったとはいえ、威力を増した核兵器の数は世界に1万5千基もあり、一瞬にして人類も地球も破壊してしまうという恐怖を与えています。

人類に地球という最高のプレゼントを神様は与えてくださいました。しかし人間は欲深く罪深い。だから今度はクリスマスにイエス様という、人間に代わってその罪を背負ってくれる「神の子」をプレゼントしてくれました。

それから2000年も経過したのに一向に世界は良くなっています。どうしたら力を合わせてこの水と緑の美しい星地球を大切にしようになるのでしょうか。どうやったら人間は争いを止め、互いに愛し合い助け合って生きるようになるのでしょうか。今後どんなに科学が進歩しても、その質問だけはAI（人工知能）ではなく、人間が答えていかなければなりません。未来の子どもたちのために。



# アメリカで記念キャンプ

## 東京・フロストバレーYMCA 40周年

ニューヨーク近郊で暮らす子どもたちにも本語のキャンプ等を提供している「東京・フロストバレーYMCA パートナリシップ」が40周年を迎えたことを記念し、米国フロストバレーYMCAで11月1日〜3日、記念キャンプが行われた。現地リーダーOBやパートナーシップに縁のある家族など約70人が集



東京からの参加者。前列中央が佐藤茂美さん。後列左3人目が中元美佳さん。

い、東京YMCAからも菅谷淳総主事をはじめ、会員・職員計9人が参加した。記念キャンプでは、晩秋の豊かな自然とアクティビティを満喫。2日目の記念式典は、日本語と英語を織り交ぜながら和やかに進められ、フロストバレーからは歴代ディレクターの名前が刻まれたプレートが贈呈された。関係者のスピーチや過去の映像を通じて、パートナーシップの歴史や意義を振り返り、次なる40年に向けて思いを一つにした。

(国際部 戸坂昇子)

### <参加者感想より>

#### パートナーシップの絆に感謝

会員／東京ワイズメンズクラブ 佐藤 茂美

今回の訪米では、記念委員長の中村恭子さんなど今も現地で仕事をしながらボランティア支援をしている皆さまの元気な姿を拝見し、大変嬉しく思いました。キャンプ中は、早朝のウォーキング、ウエルネス、クラフト、絵本などたくさんのプログラムがあり楽しくて、3日間があっという間に過ぎてしまいました。22年前に文化交流の目的で建てられたフレンドシップハウスに泊まりましたが、日米の架け橋は色あせることなく今も活用されています。

このキャンプ場で育った人は今や何人にものぼるでしょうか。今夏も在米日系人の子どもたちのキャンプがあり、東京からキャンプリーダーを派遣しました。私は彼らの報告を聞きましたが、参加する子どもたちだけでなく派遣されたリーダーもまた多くを学び、異文化間の懸け橋が次々と渡されていると感じています。40年にわたり皆さまによって導かれたこの活動が、いつまでも継続されますように祈っています。

#### 北米YMCAの価値教育を体験

職員／山手コミュニティセンター 中元 美佳

私はこれまでフロストバレーの事業に携わったことはなかったのですが、「これからの課題の一つに多様化がある。日本の文化だけでなく、外を見て視野を広げてほしい」と声をかけていただき、参加しました。フロストバレーは、すべての人に開かれていることを大切にしているそうです。滞在期間中に、キャンプサイトやプログラム説明など、至るところで見聞きした「8つの価値観」の浸透が、ポイントの一つではないかと感じました。「8つの価値観」とは日本でも提唱されているCaring(思いやり)、Honesty(誠実さ)、Respect(尊敬心)、Responsibility(責任感)に、Diversity(多様性)、Inclusiveness(包括力)、Community、Stewardship(受託責任)が加えられたものです。多様化において、違いを理解しようとすることはもとより、大切にしている価値をもとに一緒に行動していくことが、大切なのではないかと思います。フロストバレー訪問は、YMCAの価値教育という根本を、改めて考えるきっかけになりました。

## ■久米小百合さんとバイブルカフェ

### オリーブオイルのテイスティングと聖書のお話



11月15日、久米小百合さんによる「オリーブオイルテイスティングとバイブルカフェ」が、東陽町コミュニティーセンターとミッション推進委員会共催で開催されました。

ふだん聖書に触れたことのない方に、聖書に触れる機会をもってもらいたい。敷居を低く、そして興味をもって参加しやすい機会を考え、今回のカフェを実施しました。久米小百合さんは1980年前後に久保田早紀として「異邦人」などヒット曲を出した後、音楽伝道家として活動を再開。東京YMCAでもコンサートなどを行っていただいていたが、オリーブオイルソムリエの資格をとられ、テイスティングと聖書とを結びつけた講座をされていると知り、今回のイベントが実現しました。参加者は会員や地域の方など定員15名で、オリーブオイルの歴史や効能、聖書の中に出てくる油との関係などお話を聞いた後、4種類のオイルをテイスティングし、一人ひとり感想を述べました。久米さんの人柄もあって、暖かく楽しい午後のひとつを過ごすことができ、参加者からは「参加してよかったです。楽しかったです」という声が聞かれました。

沖 利柯 (東陽町コミュニティーセンター館長)

## ■世界YMCA/YWCA合同祈禱週



「2019年YMCA/YWCA合同祈禱週礼拝」が11月14日、在日本韓国YMCAを会場に行われた。今年のテーマは「ジェンダー平等に向けて、若者が権力構造を変革する」というテーマで、渡邊さゆり牧師(日本バプテスト神学校教務主任)をお招きして「光はどこにあるのか」と題してメッセージがありました。

メッセージは、聖書に書かれたことは、昔の出来事ではなく現代の社会においても同じような状況があり、つらく、苦しい経験をさせられ、そのことに悩み、つらい気持ちを持つ人は多くあるという現実がある。神様はそういった人に光を与えて下さる方である。夜は終わり朝が来るように、悲嘆の先には光がある、その苦しみから解放される時が来る。闇に苦しむ人に光を与えることができるように私たちも歩みたいというものでした。

その後、懇親の時をもち、軽食をいただきながら、YMCA、YWCAの会員、職員が懇談する時をもった。また長野市での台風19号被災者支援活動ではYMCAのボランティアがYWCAの宿泊施設を利用すること等も報告されました。

(本部事務局長 山添 仰)

## ■「日韓関係の今」を考える

### 日韓YMCA・YWCAで歴史を学ぶ

日韓政府の対立が激化している中、長年にわたり交流のあるYMCA・YWCAの仲間たちで建設的な対話ができればと11月26日、「日韓関係の今を考える公開セミナー」が開催されました。主催は在日本韓国YMCA。東京YMCAと東京YWCAが後援。約40人の会員関係者が集まり、一橋大学名誉教授の田中宏さんを講師に2時間にわたって学びました。

講師の田中宏さんは『戦後補償問題と日韓・日中関係の今』と題し、特に「日本の戦後補償は解決済み」と言われるもとなった1965年の日韓条約について、その内容とそこに至るまでの歴史を1895年の下関条約にまでさかのぼって詳述。また、1998年の日韓共同宣言、および2002年の日朝平壤宣言など、その後の変遷についても丁寧に紹介。さらにそれらが対中国への戦後補償とどう違うのか、1972年の日中共同声明の内容などについても言及するなど、一般のメディアでは報じられない史実や、日韓の温度差などについて学びました。

今回のセミナー発起人の一人である在日本韓国YMCA職員の田附和久さんは、「日韓YMCAは交流は進んでいるが歴史の知識が不足している。良い交流を続けるためには、歴史を知らなければならぬ」とコメント。会場アンケートにも「韓国側がなぜここまで怒っているのか日本ではあまり知られていない。勉強する必要を感じた」といった感想が寄せられました。

(広報室)

1階の天井まで浸水した  
賛育会クリニック



「水没の高齢者施設、犠牲者はゼロ」。今秋の台風19号での惨状を報じるTV放送が伝えた感

### シリーズ 資料室の窓から<107>

水没。犠牲者ゼロ。

本会元副総主事 齊藤 實

ここ賛育会豊野事業所は「病院・特別養護老人ホーム・介護老人保健施設」に9機関を擁する賛育会の拠点である。東京大学学生YMCA会員が設立した賛育会がここに拠点を設けた契機は、さきのアジア太平洋戦争で無医村古間村で診療活

動を手掛けたのが1945年6月。賛育会病院では小児科部長、東京YMCA野尻学荘では5年にわたってキャンプドクターを務めた長谷川雅雄の提案であった。翌1946年4月には古間に近い豊野で病院建設を起工。6月、豊野の伊豆毛神社に仮診療所を開設。同年12月に豊野病院の診療棟が出来て、既に賛育会の所有となっていた野尻学荘のベッド・毛布などを活用した。賛育会豊野事業所の第一歩である。東京で復興途上の賛育会病院の設備としても運んだという。賛育会と東京YMCAの強い絆の一端である。

嘆の画面であった。千曲川が氾濫し、支流浅川に近い賛育会豊野事業所の全施設では1階全部があつという間に水没した。でも、入所者278名は避難し終えていて無事であった。37年も前の1982年9月に被った床上浸水に学んで重ねた避難訓練が活きたのである。

この藤田逸男、河田茂、片山哲、藤本武平ら6名。病院すべての罹災を踏まえて、「長野県野尻湖畔においてYMの既設建物を買収し乳幼児婦女妊産婦疎開受入事業開設」を決めた。しかし、冬の厳しい学荘生活は避けて同じ長野の無医村古間村で診療活